# 新資料紹介：牧口常三郎が音楽家櫻井信彰へ宛てた書簡

塩　原　將　行

牧口常三郎が櫻井信彰（のぶあき）に宛てた書簡を紹介する。この時期の文献は極めて限られているので、この手紙を手掛かりに以下のことを探っていきたい。

1．創価教育学会の第一回研究生に対して牧口はどのように関わっていたか。

2．研究生制度発足以前の創価教育学会の活動がどのようなものであったか。

3．『創価教育学体系』第四巻出版後の牧口の動静はどうであったか。

なお、手紙文の旧字は、新字に改めている。

（便箋一枚目）

五月二日　　牧口常三郎

桜井信彰様

御無沙汰恐縮に存し居り候折柄両度の御手紙奉深謝候
御上京の中には色々御厚情を謝上候と共に今一度御懇談
申上度候処小生の時間遅れから遂に其機を逸し御申訳無之
且つ残念至極に奉存候不悪御宥恕願上候さて平井先生
の御令息の件戸田氏と相談仕り候処苦学生は
世話致し居候へども何分極端なる失業者を引
受け半労役の授業に従事せしめると共に日蓮正宗
の教義によって訓練をなし居る状態に候へは一般
の良家の子弟とは全く生活法を異にし双方とも
よろしからざる所がありこの点は乍遺憾縁なき
事と相成候間不悪御了承被下度願上候

（便箋二枚目）

次に教育レコードの件は見込有之へき有用の事業と
存じ候が何分目下手一杯の仕事にて余裕

Masayuki Shiohara（創価大学池田大作記念創価教育研究所客員研究員）

無之ま丶惜しいけれども当分手を割ちかね候状態
につきこれまた此度は不悪御承引被下度願上候但し
当地方に販売方の義は他の方面に物色致し
一挙両得の義と人物かあれば更に御相談申上へく候間
其節は御一報被下度願上候
木村光雄生に関する御親切なる御忠告は感
謝致し候御手紙は本人には不見せ候へども其親友
にて共に日蓮正宗に入りしものに見せ候処これは
其人の数年共同生活をした経験からすれは本人に
真に適切なる箇条にて、全く「彼が為に悪を除く
は彼が親なり」との章安大師の金言法華経精神に

（便箋三枚目）
全く合致した御辞と共々感激致し候本人には早
速申述べ前途の大望を達せしめたく存候間此の
後も宜敷御引立願上候たゞ其人と(ママ)のいふには本人
は全く生一本にて女なとへも自分の純真なるに
まかせて人も然らんと随分失礼の事も感情を害す
る事もあらんがそれだけまた心か歪まざる証拠
しかし本人の社会生活の為めには是非共忠告せざ
る能はざる点と申居候
近所へ御転居になりし御親戚の事についても態々
御知らせ被下難有奉存候其中に散歩の序にでも
御邪魔仕候折も可有之候御名前も序に御
一報被下度願上候
先は当用のみ御上京の節もあらば御一報被下度願上候面々不尽

## 解　題

### 1．書簡の日付について

櫻井信彰に宛てたこの手紙の冒頭には「五月二日」とあって、執筆年は書かれていないが、彼について詳述されている剱月峰（つるぎげっぽう）『ある小学唱歌教師一族の近代史 櫻散りぬ』（文芸社、2007 年）には「昭和十年の消印のある茶封筒には宛名を墨書し、差出人の住所は豊島区となっていた」（260 頁）とあるので、1935（昭和 10）年 5 月 2 日に書かれたものだと判断した。

## 2．櫻井信彰について

牧口常三郎から書簡を受け取った櫻井信彰は、バイオリンとビオラを演奏し[1]、唱歌の作曲もした音楽家で、唱歌・音楽の教師として長く教職にあった。彼は、1879（明治12）年2月に静岡市で出生[2]。71（同4）年6月生まれの牧口より8歳若い。91（同24）年3月に静岡師範学校附属小学校高等科を卒業後、93（同26）年9月に東京高等師範学校附属音楽学校予科に入学（14歳）。翌94（同27）年9月に本科専修部[3]へ入学し（15歳）、97（同30）年7月に同部を卒業（18歳）。同年9月に研究科へ入学（99年まで）。98（同31）年5月には東京市富士見尋常高等小学校（以下本稿では、「富士見小学校」と略す）[4]の試用教員、同年9月に専科准訓導に任用（19歳）。1901（同34）年3月には同校訓導・専科正教員に任用され、12（大正元）年10月まで14年にわたり同校教員として在職した[5]。その間牧口が、09（明治42）年2月から翌年4月まで富士見小学校の首席訓導をつとめている[6]。富士見小学校には、当時としては珍しくすでにピアノがあったため、櫻井の専修部1年後輩の滝廉太郎は、同校を訪ねては児童にピアノを弾き、唱歌を児童とともに歌い教えていたという[7]。

櫻井は、1912（大正元）年10月に不慮のけがで右掌の筋を切断。このことにより、バイオリンやビオラの演奏者の道を断念し、唱歌教師として歩む決心をしたという[8]。その後、15（同4）年から22（同11）年まで長崎県佐世保市内の高等女学校に勤務。27（昭和2）年からは神戸市内の小学校などの教員を務め、45（同20）年3月頃に現在の富山県氷見市内へ疎開。そのまま

---

1　1897年12月24日に行われた東京高等師範学校附属音楽学校学友会演奏会では、櫻井信彰がヴァイオリン、益山鎌吾がチェロ、滝廉太郎がピアノを演奏した（遠藤宏『明治音楽史考』、有朋堂、1948年、311頁参照）。『毎日新聞』1898年1月4日付1面の撃磬子「学友会演奏評」では、「滝、益山、桜井の三氏は同校在学生中ピアノ、セロ及びヴァイオリンの名手」と書かれている。

2　以下、櫻井の履歴は、前出の劔月峰『櫻散りぬ』の「櫻井信彰関連年表」などを参照。

3　当時音楽学校の本科には専修部と師範部があり、「音楽ニ特別ノ才能ヲ有スルモノ」は修業年限三カ年の専修部に進むことができた（『東京音楽学校一覧 従明治廿二年至明治廿三年』、東京音楽学校、1900年、31～32頁参照）。師範部の1895年4月卒業者に、北海道札幌師範学校初の同校出身の教員となった玉川瓶也がいる。これらについては、『東京音楽学校 創立五十年記念』（東京音楽学校、1929年）の29頁、および、「創価教育の源流」編纂委員会編『評伝 牧口常三郎』（第三文明社、2017年）の66～67頁の注（8）を参照。

4　東京市富士見尋常高等小学校は、1907年3月に高等科が分離され、東京市富士見尋常小学校と改称された（『富士見百年』、富士見小学校創立百周年記念協賛会、1978年、10頁参照）。櫻井信彰「富士見古事記」（『たかね』第7号、富士見小学校同窓会、1935年）によれば、「今日と違って通学区域の制限のなかった時でもあるが、遥か遠方から名門や学者の子が本校に通学され、為に民間の学習院との異名を取ったのも此時代〔櫻井が在職していた頃〕であった」（49頁）という。

5　前出、『富士見百年』、118頁参照。

6　同前参照。

7　松本正『瀧廉太郎』（大分県先哲叢書、大分県教育委員会、1995年）の101頁、および、『東京音楽学校一覧 従明治三十八年至明治三十九年』（東京音楽学校、1906年）の93頁を参照。宮瀬睦夫『瀧廉太郎傳』（関書院、1955年）には、「富士見小学校に奉職していた桜井信彰のところへ行っては、ここの小学校の子供と一しょに歌ったり遊んだりした」（201頁）と記されている。滝廉太郎（1879～1903年）が富士見小学校を訪れたのは、櫻井が富士見小学校に勤務するようになった1898年5月から滝が留学に出発した1901年4月までの間である。

8　前出、劔月峰『櫻散りぬ』、23頁参照。櫻井は、けがのため1年間休職した。このことについては、『都市教育』第100号（東京市教育会、1913年2月）の112頁、および、「小学校令施行規則」第122条第1号を参照。

居住し、48（同23）年4月に同地で死去している（享年69）。この書簡は、35（同10）年5月に神戸で受け取ったものである。

櫻井が学んだ東京高等師範学校附属音楽学校（東京芸術大学の前身となる一校）は、1887（明治20）年10月に音楽取調掛が改められて東京音楽学校として創設、櫻井が入学した93（同26）年の6月に附属音楽学校へ改称された。その後、99（同32）年に再び東京音楽学校として独立している。創設当初は、芸術音楽確立のための専門家育成と唱歌教員養成を目指していたが、高等師範学校附属となった頃から唱歌教員養成に力点が置かれるようになった[9]。

専修部の卒業生数は、1889年4人、91年9人、92年5人、93年4人、94年6人、95年6人、96年13人、櫻井が卒業した97年は10人、98年5人、99年3人であり、櫻井は日本における西洋音楽普及の黎明期を担う学生の一人であった[10]。

「〔信彰の義弟の土井〕滋治の言によれば祖父信彰の性格を一言で表す言葉は『狷介不羈』がぴったりだそうだ[11]」

櫻井の教え子の一人である徳川夢声は、櫻井について「紀元節の思い出」の中で、次のように書いている。

「私の母校は赤坂尋常高等小学校であるが、尋常一年生の時だけは、麹町富士見町(ママ)小学校であった。だからこの紀元節の唱歌は、富士見町小学校の唱歌教室で、桜井先生に習ったものに相違ない。

桜井先生はたしか上野〔の〕音楽学校出身で、当時としては非常にハイカラな青年であった[12]」

また、富士見小学校の卒業生で女優の東山千栄子の訪問記には、次のように書かれている。

「桜井先生って唱歌の先生がいらしたんですよ。それまでは『ヒフィミヨ』と教わっていたのを『ドレミファ』（音程を正しく口ずさむ）って本式に教えていただきました。あの譜の読み方で本式にお教えになった。それで新しい教え方だったり、ご自分自身がハイカラな先生だったのでちょっと有名だったのです。（中略）

また桜井先生のもう一つの思い出は、父母たちの会合の時にステージで先生の演出で姉妹で歌ったことがあるそうである。オペラの出来そこないみたいなものを『私のお誕生日』という設定で歌ったこともあるそうである[13]」

『櫻散りぬ』には、「総じて評価するならば祖父信彰は昔気質の一本気でわがままなプライドの高い、世渡り下手な男と評してもいいかもしれない。言い換えればハイカラではあったが、実は

---

9 前出、劔月峰『櫻散りぬ』、152頁参照。1894年に附属音楽学校に小学唱歌講習科が新設され、1900年には乙種師範科（昭和になり廃止）になった（三浦俊三郎『本邦洋楽変遷史』、日東書院、1931年、332～334頁参照）。

10 『東京音楽学校一覧 従大正二年至大正三年』（東京音楽学校、1913年）、122～127頁参照。

11 前出、劔月峰『桜散りぬ』、54頁。「狷介不羈」は、頑固に自分の意志を守って妥協せず、枠に囚われること無く、何ものにも縛られること無く自由気ままに行動すること。

12 『読売新聞』1963年2月9日付夕刊7面。

13 「女優　東山千栄子さんを訪ねて」（前出、『富士見百年』）、127頁。

無骨な古武士の匂いが漂う男であった[14]」と述べられている。

そして、櫻井信彰本人も次のように述べている。

「実を云へばこんなに永く小学校に勤める積りではなかったのだが、年を経るに従って初等教育に従事することの面白味を感じ、又他に多少の意地も手伝ってこんなに永く御厄介になって了った。御陰様で今では卒業生各位の内の或る人々から非常に懇切な待遇を得、とても吾々風情では夢にも見ることの出来ない光栄に浴する場合もあるので（中略）初等教員であったことが如何に幸福であるかとつくづく考へさせられるので当地〔神戸〕でも其事を話して若い教員達に力づける場合が多い[15]」

『櫻散りぬ』によれば、櫻井は富士見小学校退職後も教え子との交流を続け、戦地にいる教え子には励ましを惜しまなかったという[16]。また、唱歌の教師としてだけではなく、1924（大正 13）年 1 月 26 日に日本人で最初にベートーベンの第九交響曲を演奏した九大フィルハーモニーオーケストラとは、その創設者である榊保三郎（医学部教授・櫻井信彰の従兄）を通して交流を持つなど、西洋音楽の普及に貢献してきた[17]。

## ３．書簡の内容をめぐって

書簡を出した当時の牧口は、東京市豊島区目白町 2 丁目 1666 番地に住んでおり、櫻井は、1926（大正 15）年 1 月に佐世保市から神戸市へ転居し、この手紙が書かれた頃には神戸市葺合区上筒井通 1 丁目 33 番地 1 に住んでいた[18]。

「御上京の中には色々御厚情を謝上候」とあるように、この手紙が書かれたのは、牧口が 1935（昭和 10）年 3 月頃に上京した櫻井と会ったことによる。当時櫻井は、神戸 YMCA 音楽学校でヴァイオリンを教えていた[19]。36（同 11）年 8 月発行の『たかね』第 8 号に掲載された「明治三十九年卒業（以一会便り）[20]」には、「昭和十年三月桜井先生御上京歓迎会を数寄屋橋菊正食堂に開いた」（31 頁）と記されている。

続いて手紙には、「今一度御懇談申上度候処小生の時間遅れから遂に其機を逸し御申訳無之」

---

14　前出、劔月峰『櫻散りぬ』、299 ～ 300 頁。

15　前出、『たかね』第 7 号、48 頁。

16　前出、劔月峰『櫻散りぬ』、222 ～ 256 頁参照。

17　松村晶「我が国の『第九』事始め小話―大正期の大学における洋楽活動―」（『學士會会報』第 894 号、学士会、2012 年 5 月）の 99 ～ 104 頁、『九大フィルハーモニー・オーケストラ 50 年史（1909-1959）』（九大フィルハーモニー会、1963 年）の 19･162 頁、横田庄一郎『第九「初めて」物語』（朔北社、2002 年）の 166 ～ 183 頁、などを参照。『櫻散りぬ』の著者によれば、櫻井信彰は NHK 大阪の少女合唱団や浪花唱歌会にも関わっていたという。

18　前出の『評伝 牧口常三郎』の 396 頁の注（27）、前出の劔月峰『櫻散りぬ』の 71・322 頁、『たかね』第 8 号（富士見小学校同窓会、1936 年）の 32 頁、「音楽人名録」（大日本音楽協会編『音楽年鑑 昭和十二年度』、共益商社書店、1937 年 1 月）の 202 頁、などを参照。

19　東京音楽協会編『音楽年鑑 昭和十年版』（音楽世界社、1935 年 3 月）、261 頁参照。

20　「以一会」は、富士見小学校の高等科を 1906 年に卒業した者および関係した教員で構成。櫻井は、満 19 歳の 1898 年 5 月から富士見小学校で教職に就いたが（前出、劔月峰『櫻散りぬ』、170 頁参照）、以一会の会員はその年 4 月に尋常科に入学している。

とある。牧口の方から再度会いたいと申し入れていたが、牧口の都合から実現しなかった。当時牧口は、麻布新堀小学校の校長を最後に教職から離れ、東京市教育局嘱託[21]として郷土誌に関する調査を行うとともに、創価教育学会に集う青年教師の育成に努めていた。

次に、「平井先生の御令息の件」とあり、櫻井から牧口に、上京して働きながら学びたいという知人（平井氏）の息子さんの働き先を紹介してもらいたい旨、依頼があったようである。牧口は「〔時習学館を経営している〕戸田〔城外〕氏と相談仕り候処苦学生は世話致し居候へども何分極端なる失業者を引受け半労役の授業に従事せしめると共に日蓮正宗の教義によって訓練をなし居る状態に候へは一般の良家の子弟とは全く生活法を異にし双方ともよろしからざる所があり」として、この件を丁重に断っている。

この文面から、当時から時習学館では、働きながら学びたいと考える青年に対して、学館の授業を受け持たせるとともに、日蓮仏法に基づいた信仰生活をさせていたことが分かる。これは、「宗教革命生活の実践記録　創価教育学会宗教革命教団報告」（『新教』第6巻第4号、日本小学館、1936年4月）に書かれている「創価教育学の研究所の学生と共に、さゝやかな宗教革命生活の道場の出現を見るに至った」（70頁）と重なることである。

続いて、「教育レコードの件は見込有之へき有用の事業と存じ候が」とあり、櫻井から牧口に教育レコードの販売に関して何らかの依頼をしたようである。前出の『たかね』第8号の櫻井信彰の紹介文には、教職ではなく「仕事　レコード会社に御関係」（32頁）と記されている。また、剱月峰『櫻散りぬ』には、「昭和十年頃にはレコードを学校に斡旋する仕事をしていた形跡がある」（300頁）と書かれおり、関連した資料も残されていた。

当時レコードは、音声の記録媒体として幅広く活用されていた。日本教育音楽協会の理事であった青柳善吾は「昭和期の音楽教育」において、「ここにレコードの教育的効用を眺めたい。鑑賞教育が漸くさかんになってきて音楽教室で名曲の名演奏を鑑賞させようとする場合は、レコードの力を借りるほかに途がない。そこで、各学校では、蓄音機とレコードを設備することが昭和の初期からさかんになってきた[22]」と書いている。

また、『コロムビア教育レコード総目録』（日本蓄音器商会、1940年4月）の目次を見ると、「国語の教育と研究に」「音楽の鑑賞と研究に」「唱歌と童謡」「童話と児童劇と物語」「算術と珠算」「体育と遊戯に」「語学の研究と教授に」「リーガル〔普及版〕」の項目が立てられ、75頁にわたり幅広い分野のレコードのタイトルが掲載されている。

教育レコードの件についても牧口は、「何分目下手一杯の仕事にて余裕無之まゝ惜しいけれども当分手を割ちかね候状態につきこれまた此度は不悪御承引被下度願上候」と断っている。

---

[21] 『東京市公報』第2324号（東京市役所、1933年10月14日）には、同年10月9日付の「任免及辞令」として、「牧口常三郎　郷土誌ニ関スル調査ヲ嘱託候也」（1945頁）と記されている。また、『東京市公報』第2984号（東京市役所、1938年4月16日）には、同年3月31日付の「任免及辞令」として「牧口常三郎　郷土史ニ関スル調査嘱託ヲ解除候也」（792頁）と記されている。

[22] 青柳善吾『改訂新版 本邦音楽教育史』（青柳寿美子、1979年）、362頁。

当時牧口は、『創価教育学体系』を完成させるため各論の執筆者を育てようとしていた[23]。1934（同9）年5月に『新教材集録』第4巻第4号に掲載された牧口常三郎「国語教育学習指導案の研究発表（上）[24]」の「はしがき」には、「日本小学教育研究会五月の集会に於て、牧口会長が創価教育学体系第四巻及五巻の教育方法論の脱稿をなし[25]、その原理を応用した教育各論として各教科の学習指導法の研究に進まんとするに当り、其の中の一例として試に参集の会員に発表し以て各学校に帰り、之が実験を試みその結果を持寄り、次の集会に於て更に研究をなすこととしたものである」（傍線引用者、19頁）と書かれており、同年6月20日には、『創価教育学体系』第4巻が出版されている。

体系第4巻「教育方法論」に続いて、第5巻「教育方法論 下」を脱稿した牧口は、日本小学教育研究会に集った教員たちによって創価教育学に基づいた各論の研究が進むように力をいれていたのである。

手紙には、次に「木村光雄生に関する御親切なる御忠告は感謝致し候」と書かれているので、牧口から櫻井へ木村へのアドバイスを依頼したようだ。木村は、北海道の浜益郡幌村に出生。1927（同2）年3月に北海道札幌師範学校本科第一部を卒業後、30（同5）年4月まで帯広町の柏尋常高等小学校に勤務。31（同6）年春、声楽を極めたいとして上京。イタリアのオペラ歌手アテリオ・オベレッテェイなどに師事、さらに、音楽家でありカトリック（サレジオ会修道会）神父であったヴィンチェンツォ・チマッティに師事した。その間、32（同7）年8月31日から東京市の碑尋常高等小学校に勤務しながら、日本大学芸術科にも一年在籍している[26]。

櫻井信彰は、次女瑠璃子に「自分が死んだら本当のグレゴリー音楽を知るものは日本にいなくなる」と度々語っていたという[27]。〝グレゴリー音楽〟は、ローマ・カトリックの法王グレゴリー一世（在位590～604年）が制定した教会音楽で、リズムは散文のリズムであって、小節のない音楽であり、全体の印象は音楽的朗読というようなものであるとのこと[28]。木村も、チマッティを通してグレゴリー聖歌に接していたのではないか。

上京した木村光雄は、1932（同7）年5月頃、牧口が勤務する麻布新堀小学校を訪ねている。その後、碑尋常高等小学校で同僚となった三ツ矢孝とともに、牧口宅を訪問。34（同9）年10

---

23 『新教材集録』第4巻第4号（日本小学館、1934年4月）の折り込み広告、および、牧口常三郎「国語教育学習指導案の研究発表（上）」（『新教材集録』第4巻第4号、日本小学館、1934年5月）の19頁を参照。

24 この論考は、『牧口常三郎全集』全10巻（第三文明社、1981～96年）には未収録。

25 『創価教育学体系』は、第五巻までで総論が完結する。ただし、第五巻は出版されなかった（前出、『評伝牧口常三郎』、361～364頁参照）。

26 木村光雄については、木村光雄『歌集 一筋の泥濘の道』（詩歌叢書第86篇、白日社、1976年）の69～70頁、『かしわ 創立50周年記念』（柏小学校創立50周年記念協賛会、1970年）の43頁、『会報』第20号（北師同窓会、1930年）の64頁、『同窓会会員名簿』（北師同窓会、1943年）の67頁、『碑小学校八十五年史』（碑小学校創立85周年記念事業後援会、1964年）の166頁、などを参照。

27 前出、剱月峰『櫻散りぬ』、92頁参照。

28 諸井三郎『音楽の世界』（音楽之友社、1951年）、42～43頁参照。

月に、二人は日蓮仏法を信奉する創価教育学会の会員になった[29]。木村は、同会との関わりについて、自著『歌集 一筋の泥濘の道』の「あとがき」に次のように記している。

「教職にあった関係で札幌師範学校同窓の先輩であられる牧口常三郎氏から、氏の著書・創価教育学体系による認識と評価、真理と価値について指導を受けた。法華経は、後日富士大石寺管長となられた堀米泰栄氏に手ほどきを受けた。この頃の研修集会が今日の創価学会の草わけとは今昔の感深いものがある」

前出の「宗教革命生活の実践記録」には、次のように書かれている。

「吾々の宗教革命団体の起源は昭和四年春、創価教育学体系の第一巻の起稿以前にある。爾来六年余の星霜を重ねるに至り、最初は牧口研究所長一人の物数奇な気違ひじみた言説として驚異の目を見はるのみで、一顧の耳を傾けるものさへもなかったもゝ如くであったが、先づ常務理事戸田城外氏が共鳴し次に渡辺力、山田高正の両氏も加はり、創価教育学の研究所の学生と共に、さゝやかな宗教革命生活の道場の出現を見るに至ったのであるが、次第に時習学館員中の篤志者に参加するものが出来た中に、一昨年〔1934年〕十二(ママ)月二十六日に木村光雄、三ツ矢孝の両氏が、外部より卒先して宗教革命の同志として参加したことは、本道場の発展に大なる動力を与へたものといふべきである」（傍線引用者、70頁）

劔月峰『櫻散りぬ』によれば、櫻井の次女瑠璃子は「信彰宛の手紙が書かれた当時は日蓮宗の教義を純粋に勉強する会を彼〔牧口〕が主催していた頃だ」と語っていたという（260頁参照）。牧口が創価教育学会の活動に専念できるのは、1938（同13）年3月に東京市教育局の嘱託を退職した以降である。

その後木村光雄は、1936（同11）年10月、三ツ矢とともに第一回の研究生（創価教育法の実験証明委員）となる。『創価教育法の科学的超宗教的実験証明』（1937年9月配布）では、実験証明委員の一人として、分担教科：唱歌科、ベレッテー門下声学〔楽〕家、碑小学校訓導、として紹介されている[30]。『新教』第6巻第2号（日本小学館、1936年2月）の「創価教育学会の消息」には、「本学会研究部員　木村光雄氏中央放送局に於て、『小学生の時間』に独唱放送。（一月二十八日午後二時四十分）」と書かれている。彼は37（同12）年1月に北品川の料理店「玄海」で行われた創価教育学会の懇親会には他の第一回研究生とともに出席しているが[31]、39（同14）年12月に菊水で行われた第一回総会には出席していない。

木村は、声楽（テノール）の研鑽を続けるとともに、作曲も行っている。詩歌俳壇声の文庫の

---

[29] 木村光雄・三ツ矢孝からの聞き取りの記録、および、三ツ矢孝「開かれた新人生の道」（美坂房洋編『牧口常三郎』、聖教新聞社、1972年）の452～455頁を参照。三ツ矢孝は、愛知県渥美郡高豊村（現在の豊橋市内）出身。立正大学専門部国漢科を卒業し、1932年1月15日より碑尋常高等小学校に勤務。その後、亀青尋常高等小学校を経て、37年には尾久西尋常小学校に勤務している。また、創価教育法の実験証明委員としては、書方科を担当した。これらについては、『歌集 寂光』（かぐのみ社、1935年）の「『寂光』参加歌人録」の10頁、『新教』第6巻第5号（日本小学館、1936年5月）の149頁、『牧口常三郎全集』第8巻（第三文明社、1984年）の13頁、などを参照。

[30] 前出、『牧口常三郎全集』第8巻、13頁参照。

[31] 前出、『評伝 牧口常三郎』、379～381頁参照。

会が企画し、36（同 11）年にエヂソン・レコードが制作・販売した「第一回詩歌レコード」に前田夕暮の短歌に木村光雄が作曲・独唱したものが収められている[32]。

手紙に「其親友にて共に日蓮正宗に入りしもの」とあるが、これは三ツ矢孝のことである。三ツ矢は創価教育学会の機関誌『新教』『教育改造』に度々寄稿して、教育学会の活動に積極的に関わっているが、木村はそれほどでもなかったようである[33]。この手紙からは、牧口の木村に対する心配りが読み取れる。

その後木村は北海道に戻り、1944（同 19）年 3 月から柏国民学校（現在の帯広市立柏小学校）に勤めている。後に彼は、「私は帯広に帰り再び現場の教壇に立ちながら快快として楽しまず、余憤やるかたないストレスがカトリック入信となったが、今もなお低迷が続いている次第である」と記している[34]。

続いて手紙には、「近所へ御転居になりし御親戚の事についても態々御知らせ被下難有奉存候」とある。剱月峰『櫻散りぬ』によれば、櫻井信彰が東京在住の親戚で日常的に交流していたのは、内田貢（魯庵、1868 ～ 1929 年）とその長男巌（1900 ～ 1953 年）である。貢はすでに亡くなっているので、巌に絞られる。彼は帝展無審査の洋画家で、戦前から戦後にかけて日本洋画界において重要な足跡を残した人物である[35]。

## 4．牧口常三郎と櫻井信彰の関わり

### a. 『少年界』『少女界』への櫻井信彰作曲の唱歌掲載を通して

牧口と櫻井との交わりは、富士見小学校以前に遡ることができる。それは、金港堂が 1902（明治 35）年 2 月に創刊した『少年界』、同年 4 月に創刊した『少女界[36]』に櫻井が作曲した唱歌が掲載されていることによる（作品一覧参照）[37]。牧口は、02（同 35）年 3 月頃に金港堂に就職し、『少

---

32 「ベレッティと其門下生の大演奏会」（『月刊楽譜』第 24 巻 5 月号、東京音楽協会、1935 年）の 93 頁、『短歌年鑑 第一輯』（1938 年、改造社）の 439 頁、『ぬはり』第 1 巻第 4 号（ぬはり社、1936 年 4 月）の裏表紙広告、『俳句文学全集第五 臼田亜浪篇』（第一書房、1938 年）の 490 頁、星野慎一『外国文学修行』（大門出版、1966 年）の 156 頁、などを参照。

33 木村が寄稿したのは、『教育改造』第 6 巻第 7 号（日本小学館、1936 年 7 月）に掲載された「教育生活断片」のみである。

34 前出の木村光雄『歌集 一筋の泥濘の道』の 69 ～ 70 頁、および、前出の『かしわ 創立 50 周年記念』の 43 頁を参照。

35 前出、剱月峰『櫻散りぬ』、145 ～ 148 頁参照。1932 年に留学から帰国した内田巌は、世田谷区世田谷 4 丁目に住んでいた（『日本美術年鑑 昭和十一年度』、美術研究所、1936 年、96 頁参照）。

36 『少女界』は、日本で最初の少女雑誌。神谷鶴伴「編輯局の十年間」（『少女界』紀念十年号・第 10 巻第 6 号、金港堂、1911 年 5 月）には「我が国の少女雑誌としては最も初めに世に生れ出た雑誌であります」（71 頁）と書かれており、木村小舟『少年文学史』明治篇下巻（童話春秋社、1942 年）には「少女専門の雑誌として、初めて生れ出でたる者は、金港堂の企てたる『少女界』であった」（268 頁）と記されている。

37 櫻井が作曲した作品としては、『少年界』『少女界』に掲載された作品のほかに、「花火」（旗野十一郎（たりひこ） 作歌、『学校唱歌』に掲載）、「赤穂義士」（月庭優 作歌）、「富士登山」（中野虎三 作歌）、「感傷」（美木行雄 作詞）が確認できた。「花火」については新清次郎『小学校唱歌教授法』（啓文館、1903 年）の 79 頁を、「感傷」については美木行雄『短歌朗吟の研究』（歌謡社、1934 年）の 45 頁を参照。

女界』の編輯などに従事。03（同36）年2月頃、金港堂を退職している[38]。牧口は、編集者として何度か櫻井と会っていたと思われる。

### 『少女界』『少年界』に掲載された櫻井信彰が作曲した作品一覧

| 発行年月 | | 少年界 | | | | | | | | 少女界 | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 西暦 | 和暦 | 月 | 日 | 巻 | 号 | 作品名 | 作歌 | 作曲 | 備考 | 月 | 日 | 巻 | 号 | 作品名 | 作歌 | 作曲 | 備考 |
| 1902 | 明治35 | 2 | 11 | 1 | 1 | 初春 | 大和田建樹 | 吉田　信太 | 数字譜で記載 | | | | | | | | |
| | | 3 | 11 | | 2 | 少年界唱歌 | 大和田建樹 | 楽譜未記載 | | | | | | | | | |
| | | 4 | 11 | | 3 | 日英同盟 | 大和田建樹 | 楽譜未記載 | | 4 | 11 | 1 | 1 | 運動会 | 大和田建樹 | 吉田　信太 | 楽譜なし |
| | | 5 | 11 | | 4 | 川あそび | 大和田建樹 | 吉田　信太 | 以下、五線譜 | 5 | 11 | | 2 | わらびとり | 大和田建樹 | 吉田　信太 | 以下、五線譜 |
| | | 6 | 11 | | 5 | 蛍狩 | 大和田建樹 | 櫻井　信彰 | 本文に作曲者名あり | 6 | 11 | | 3 | 花菖蒲 | 大和田建樹 | 櫻井　信彰 | 本文に作曲者名あり |
| | | 7 | 1 | | 6 | 唱歌の記載なし | ― | ― | 定期増刊号 | | | | | | | | |
| | | 7 | 11 | | 7 | 金魚 | 大和田建樹 | 櫻井　信彰 | 本文に作曲者名あり | 7 | 11 | | 4 | 七夕 | 大和田建樹 | 櫻井　信彰 | 本文に作曲者名あり |
| | | 8 | 11 | | 8 | 山のぼり | 大和田建樹 | 櫻井　信彰 | 本文に作曲者名あり | 8 | 11 | | 5 | 夏休み | 大和田建樹 | 櫻井　信彰 | 本文に作曲者名あり |
| | | 9 | 11 | | 9 | 秋の月 | 大和田建樹 | 櫻井　信彰 | 本文に作曲者名なし | 9 | 11 | | 6 | 秋の七草 | 大和田建樹 | 櫻井　信彰 | 本文に作曲者名あり |
| | | 10 | 11 | | 10 | 茸狩 | 服部　躬治 | 櫻井　信彰 | 本文に作曲者名なし | 10 | 11 | | 7 | 菊見 | 服部　躬治 | 櫻井　信彰 | 本文に作曲者名あり |
| | | | | | | | | | | 11 | 3 | | 8 | 唱歌の記載なし | ― | ― | 定期増刊号 |
| | | 11 | 11 | | 11 | 初霜 | 服部　躬治 | 櫻井　信彰 | 本文に作曲者名なし | 11 | 11 | | 9 | 紅葉 | 服部　躬治 | 櫻井　信彰 | 本文に作曲者名あり |
| | | 12 | 11 | | 12 | 雪戦 | 服部　躬治 | 櫻井　信彰 | 本文に作曲者名なし | 12 | 11 | | 10 | 水仙 | 服部　躬治 | 櫻井　信彰 | 本文に作曲者名あり |
| 1903 | 明治36 | 1 | 11 | 2 | 1 | 凧揚げ | 服部　躬治 | 櫻井　信彰 | 本文に作曲者名なし | 1 | 11 | 2 | 1 | 追羽根 | 服部　躬治 | 櫻井　信彰 | 本文に作曲者名あり |
| | | 2 | 11 | | 2 | 初午 | 服部　躬治 | 櫻井　信彰 | 本文に作曲者名なし | 2 | 11 | | 2 | 梅 | 服部　躬治 | 櫻井　信彰 | 本文に作曲者名あり |
| | | 3 | 11 | | 3 | 野火 | 服部　躬治 | 櫻井　信彰 | 本文に作曲者名あり | 3 | 11 | | 3 | 雛祭り | 服部　躬治 | 楽譜はあるが作曲者未記載 | |
| | | 4 | 11 | | 4 | 遠足 | 服部　躬治 | 櫻井　信彰 | 本文に作曲者名あり | 4 | 11 | | 4 | 菫 | 服部　躬治 | 楽譜はあるが作曲者未記載 | |
| | | 5 | 5 | | 5 | 唱歌の記載なし | ― | ― | 定期増刊号 | | | | | | | | |
| | | 5 | 11 | | 6 | 五月幟 | 服部　躬治 | 櫻井　信彰 | 本文に作曲者名あり | 5 | 11 | | 5 | 牡丹 | 服部　躬治 | 櫻井　信彰 | |
| | | 6 | 11 | | 7 | 唱歌の記載なし | ― | ― | | 6 | 11 | | 6 | 唱歌の記載なし | ― | ― | |

※作品一覧にある服部窮治（もとはる）[39]は、落合直文門下の歌人。当時、大和田建樹[40]・落合直文・服部窮治は、ともに跡見女学校の講師[41]。吉田信太[42]は、櫻井信彰の東京音楽学校の2年先輩。当時は、広島高等師範学校の助教授。

---

38 前出、『評伝 牧口常三郎』、86・88頁参照。調査した『少女界』第一巻から第二巻までの「寄稿を歓迎す」には、「金港堂編輯部少年界少女界係にあてゝ送られたし」と書かれていることから、『少年界』と『少女界』の編輯部は協力関係にあったと思われる。

39 服部窮治（1875～1925年）は、福島県岩瀬郡須賀川町（現在の須賀川市）生まれの歌人（『小川小学校誌』、同編纂委員会、1989年、126～128頁参照）。

40 大和田建樹（1857～1910年）は、詩人・作詞家。1886年から91年まで東京高等師範学校教授。その後、明治女学校・跡見女学校などに勤務しながら詩作に専念した。彼が作詞した曲としては、「故郷の空」「鉄道唱歌」などが知られている。これらについては、『愛媛が生んだ国文学者大和田建樹』（南海放送サンパーク美術館、1993年）の2～5頁などを参照。

41 『汲泉』第1号（跡見校友会、1900年6月）、131～132頁参照。

42 吉田信太（1870～1954年）は、音楽教師・作曲家。東京高等師範学校附属音楽学校本科師範部を1895年4月に卒業。1902年から13年にかけて、広島高等師範学校に助教授・教授として勤務。これらについては、前出の『東京音楽学校一覧 従大正二年至大正三年』の135頁、『広島高等師範学校創立四十年史』（広島文理科大学、1942年）の422頁、各年の『職員録』（印刷局）、などを参照。

### b.　大日本高等女学会（主幹：牧口）の「少女音楽会」に櫻井が関与した可能性

牧口が主幹を務めた大日本高等女学会（1905 年 5 月創立）は、1907（明治 40）年 3 月頃から少女音楽会を毎週行うことにした[43]。『大家庭』第 2 巻第 4 号（1907 年 2 月 25 日）には、「少女音楽会　毎日曜日午後一時より三時まで、本会事務所に於て、この道の熱心家出席して教授す。誰方にても御来会あれ」（19 頁）と案内されている。さらに、月 1 回第三日曜日の午後一時から開催されている技芸実習講話会の第 17 回（1907 年 5 月 19 日）の式次第にはバイオリンが入っており、東京音楽学校バイオリン選科に在籍している伊野部東海太郎の名前が書かれている[44]。少女音楽会に櫻井が関わったことは、現時点で確認できていないが、今後の課題として記しておきたい。

### c．牧口が富士見小学校に在職していた時の交わり

当時の富士見小学校は、校長小関源助のもと、首席訓導牧口以下教員 31 人、児童 1264 人の大規模な小学校であった[45]。1909（明治 42）年 2 月から翌年 4 月までの間は、牧口が櫻井の上司という立場である。しかし、牧口は、前職であった大日本高等女学会の主幹を健康上の理由で 08（同 41）年 8 月に離任し[46]、富士見小学校も「疾病其職ニ堪ヘサルニ由ル」として、わずか一年余りで 10（同 43）年 4 月に退職している[47]。この頃牧口は、万全の体調ではなかったと思われる。櫻井も牧口との具体的な関わりについては記してはいない。

### d．1910 年から 1935 年までの牧口と櫻井の交流について

牧口が富士見小学校を退職してから、この手紙が出された 1935（昭和 10）年 5 月まで、二人の交流はなかったのであろうか。現時点で、二人の交流を示す資料は見つかっていない。今後の調査に期待したい。

### e.　1935 年以降の交流について

牧口が手紙を出して 2 カ月後の 1935（昭和 10）年 7 月に執筆された櫻井信彰「富士見古事記」（前出、『たかね』第 7 号）には、次のように書かれている。

「人文地理学の著者として有名な牧口常三郎君は今でも御懇意に願っている。氏は今でも教育著述に忙しく日蓮宗の造詣も深い。富士見職員であったのは僅かの間であった」（傍線引用者、56 頁）

---

43　明治 40（1907）年は、日本の音楽教育にとって節目の年となった。前出の青柳善吾『改訂新版 本邦音楽教育史』には、「明治四十年三月にはさらに小学校令の改正が行われ、（中略）尋常小学校の教科目を改めて、修身、国語、算術、日本歴史、地理、理科、図画、唱歌、体操、と定め、（中略）ここにおいて初めて唱歌は必須科目として、全国画一的に課することになったのは、国民教育の一大進歩であるといってよい」（傍線引用者、221 頁）と記されている。

44　大日本高等女学会の「会告」（『日本の少女』第 4 巻第 5 号、大日本少女会、1907 年 5 月）の巻頭広告を参照。

45　「小学校参観記　東京市立富士見尋常小学校」（『少女之友』第 3 巻第 6 号、実業之日本社、1910 年 5 月）、37 頁参照。

46　牧口自筆の「履歴書」（1909 年 1 月）を参照。牧口が大日本高等女学会を離れることになったのは、彼の健康上の理由とされている。同会が発行した最後の雑誌となる『女子学芸雑誌』第 1 巻第 2 号（1908 年 9 月）の「本会記事」には、「本会常務幹事牧口常三郎氏は先般来病気の処、本〔九〕月一日より引籠り静養、本会の会務に与らず」（59 頁）と書かれている。

47　1910 年 4 月 15 日付の東京市長尾崎行雄から東京府知事阿部浩への「進達」による。

牧口と会った櫻井は、「教育著述に忙しく日蓮宗の造詣も深い」と書いている。おそらくそのような話があったのであろう。現時点で、1935（同 10）年以降の二人の交流を示す資料は見つかっていないが、牧口は、40（同 15）年、41（同 16）年の二度兵庫県に訪れていることから[48]、今後の調査に期待したい。

牧口と櫻井の交友が 30 年経っても続いていたのは、二人とも自分自身に正直に生きた誠実な人間であり、お互いの歩んできた道を尊重してきたからではなかろうか。

## 5．今後の課題

この手紙が発見されたことで、2 つの課題が明確になった。

1．約 1 年間の富士見小学校在職時の牧口について明らかにすること。

2．創価教育学会の揺籃期を明らかにしていくこと。

今後、これらの課題についても取り組んでいくことにしたい。

[48] 「創価教育の源流」編纂委員会編『評伝 戸田城聖』上巻（第三文明社、2019 年）、344 ～ 345 頁の注（12）を参照。